

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度 派遣報告書

報告者氏名; 福島 直樹

2011 年度 (入学)・編入

1. 研究課題:

ラオス焼畑民の研究

2. 派遣期間:

平成 23 年 8 月 7 日 ~ 23 年 9 月 24 日 (49 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

- 1) 郡や村の役場にある行政文書の保存状態は悪く、当該村の人口や世帯数の異動、家畜頭数、財政状況等、過去の村の状況を説明する物証が得られることに過度に期待しない方がよい。
- 2) 雨季の村へのアクセスは年間を通して最悪である。村にアクセスできない場合もある。つまり将来の本調査に雨季がかかることが見込まれる場合には、事前の予備調査は雨季に行なうのがよい。雨季のアクセス可能性を十分に考慮した調査計画が必用である。
- 3) 査証の延長は首都ビエンチャンでしかできない。査証の期限を超過した場合、一日あたり US10\$ の罰金がとられることがわかっているにもかかわらず、最寄りのイミグレーションにたどりつくのは容易ではない。
- 4) 村長が村のことをよく知る人物とは限らない。村長への聞き取りを終えた上で、村の知恵者を紹介してもらうのがよい。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

- 1) 雨季の移動は、陸路にこだわらずに船を活用できるか考慮してよいが、リスクも合わせて考慮する。
- 2) インタビューの裏をとる。インタビューの一次資料としての客観性や検証可能性を高めるために何ができるか、さらに検討する必要がある。
- 3) 調査を手掛ける際のアプローチが、自然環境の変化に関するものか、自然 - ヒト関係の変化に関するものか、ヒト - ヒト関係の変化に関するものか、自覚的でないと表面的な事象を追うだけに終わりがちである。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

担当の小川さんが親身に相談にのってくれたおかげで、面倒な書類の作成も、一つひとつこなすことができました。ありがとうございました。

帰国の日程をはじめから設定せずに、調査の進捗状況に合わせて柔軟に帰国の日程を変更できるようなプログラムの方がよいと当初は考えていたが、帰国の日程(フライト)を決めてからでないと調査を始められないような今回のプログラムは、そのためむしろ緊張感を持って調査に臨めた気がします。